

(研究ノート)

ピコ・デラ・ミランドラはどのように「いにしへの神学」を受け継いだか

How did Pico della Mirandola inherit “prisca theologia”?

枝村 祥平

Shohei EDAMURA

ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラ（1463-94）はルネサンス哲学においてしばしば、マルシリオ・フィチーノ（1433-99）と並び称される。フィチーノに師事したピコは師同様、古代ギリシアの文献を尊び、そこにキリスト教と矛盾しない神学を見出そうとした。フィチーノは「いにしへの神学（prisca theologia）」の概念を介して、神は一部の選ばれた人々に徐々に最も深遠な真理を知らしめたと論じ、そうした人々を「いにしへの神学者たち（prisca theologi）」と呼ぶ。具体的には、ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、ピロラオス、プラトンという生まれた時代・活躍した地域を異にする7人の先人たちが、それぞれの理性を駆使することで、キリスト教とも整合的な神学を獲得したとフィチーノは理解していた¹。そして彼は自分こそが、先人たちの系譜をルネサンスの時代に継ぐ人物だと考えていたのである。

私は以前さしあたって次のような仕方で、「いにしへの神学たち」が共有しているとフィチーノが解釈している7つのテーゼを列挙した。

- ① 唯一の神の存在と、その一性の強調 彼らはすべて、厳密にはただ一人の神のみが存在すると考えた。
- ② 神が摂理をもって宇宙を創造したこと 神は知性と意志を駆使し、宇宙を創造した。神は単に盲目的に宇宙を創造したわけではなく、そのうちには摂理が働いている。
- ③ 三位一体の暗示 父、子、聖霊が唯一の神の三つの位格であるという教えは長らくキリスト教の根幹をなしているが、ゾロアスターは早くに神の父性を強調したし、オルペウスは父性と子性について語り、ヘルメスとプラトンは唯一の神がもつ三つの位格に実質的に気づいていた。
- ④ 魂の不死 個々の人間の魂は不死であり、身体が破壊されても個的なものとして存続する。魂は身体とは本質的に異なり、区別されている。
- ⑤ 人間の尊厳 人間の魂は、宗教をもつことができるなど、動物の魂にはないもろもろの特質を備えており、それが人間の尊厳をなしている。
- ⑥ 神へ向かうことによる、人間の救済 人間はふとしたことで墮落してしまうが、一方で敬虔に神に向かうことで、墮落から回復し、神に近づくことさえできる。秘儀による奇蹟、自然的魔術、音楽による癒しなどは、魂が神に向かうことを助けうる。

⑦ 人間よりも上位の天使あるいは霊（ダイモン）の存在 神より下位であるが人間よりも上位である存在が認められており、人間を導いたり、ときに墮落させたりするとされる。ただ彼らよりも下位であるからといって、人間の尊厳が失われるわけではない。²

それでは、フィチーノに師事しながらも、ときには師と異なる説を主張することも辞さなかった（言ってみればプラトンに対するアリストテレスのようなどころさえある）ピコは、以上のテーゼで示されるようないにしへの神学を受け継いだと言えるのだろうか³。確かにピコも『人間の尊厳について』で、「いにしへの神学」という言葉を明確に使ってはいる。

それゆえ私は、諸々の一般的な教説に加え、ヘルメス・トリスメギストスのいにしへの神学についての多くのことや、カルデア人たちの学説とピュタゴラスの学説に関する多くのこと、そしてヘブライ人たちの秘儀に関する多くのことを添えて満足せず、自然的なものたちと神的なものたちについてわれわれが発見し省察したさらに多くのことを、討論されるべきものとして提示したのです。⁴

ただ、上の箇所からはピコが「いにしへの神学」（特にヘルメスが持っていた思想に代表されるような）に関心をよせていたことは読み取れるが、ピコが考えたいにしへの神学の内容の詳細がそこから読み取れるわけではない。また、ここではピコが公開し討論の対象としようとしている諸命題、つまり『900の提題』の諸命題には「いにしへの神学」に関するものがあることが示唆されているが、ピコがどこまで強くいにしへの神学の理念を継承しようとしているかは、この箇所からはわからない。

『人間の尊厳について』の少し後の箇所では、ピコはフィチーノにならって「いにしへの神学者たち」を列挙する。

さて、それ〔つまりアリストテレス主義者たちやプラトン主義者たちの教説〕に加えてわれわれが持ち出した新しいことというと、数によって哲学する古代の企てです。それはたしかに、いにしへの神学者たちによって、とりわけピュタゴラスによって、またアグラオパモス、ピロラオス、プラトンによって、そして初期プラトン主義者たちによって尊重されてきました。しかし、それは嵐によって、つまり後の人々の無関心によって、他の輝かしいものたちと同じくすたれ、その諸々の痕跡はというとほとんど見出されないようになりました。⁵

ここでピコは、数を駆使した哲学的考察という限定的なトピックについて論じているが、興味深いのは彼がフィチーノが「いにしへの神学者たち」に含めなかったプラトン以降の人物たち、「初期のプラトン主義者たち」を挙げている事実である。この箇所は、ピコが

フィチーノの思想を受け継ぎつつ、普遍的な神学を保持した人物たちの範囲をフィチーノよりも広くとっていることを示唆する。以上の予備的考察を受けて本研究ノートでは、ピコがフィチーノのいう「いにしへの神学」の理念をどう変容させつつ継承したかをさぐる。具体的には、ピコが『人間の尊厳について』『存在、そして一について』『ヘプタプルス』において、①から⑦までのテーゼをどの程度支持しているかをみる（第一節）。さらに、ピコがフィチーノのいう「いにしへの神学者たち」をどう評価したか（第二節）、彼ら以外の普遍的な神学を保持していたとピコが評価する人物たちを列挙しピコがどう評価していたかを『900の提題』も踏まえながら論じる（第三節）。

1. ピコ自身の神学

ピコは①のテーゼを受け入れている。ピコは一という称号が神に帰せられるという⁶。彼によれば神とは「存在そのもの、一そのもの、善そのもの、そして真そのもの (ipsum ens, ipsum unum, ipsum bonum similiter et ipsum verum)」である⁷。ピコはキリスト教徒を自認し、かつキリスト者にとっての神は古代ギリシアの偉大な哲学者が示したような性質を実際にもっている、と考えており、この点でフィチーノと似ている。

②について。ピコは神を「建造者 (architectus)」だとし、この世界を隠れた知恵の法則によって創造したとしている⁸。ピコによれば、唯一なる神は世界ないし宇宙全体の創造者であり、その創造においては神の知恵が発揮されている。ピコは神の摂理に従った創造を信じている、といえる。

③について。ピコはキリスト教徒だということもあり、三位一体を明示的に認める⁹。『人間の尊厳について』の序論で、神は建造者であるとともに「父 (Pater)」だとされる¹⁰。そしてピコはイエス・キリストは「闇と死の影のうちにいる者たちを照らす、父なる実体の輝き」だとし¹¹、また「主の霊 (spiritus domini)」は天よりも高いところにある水の上に生まれた、という¹²。

④について。『人間の尊厳について』で、ピコはどの人間の魂も不死だと断言はしないが、人間が自分自身の運命を選び取り神的不死性を達成することができると示唆している¹³。

⑤について。ピコは人間は動物のなかでもっとも幸福であり、あらゆる驚嘆に値するものだとしている¹⁴。ピコは「人間は多様な、多くの形をとる、そして破壊的な本性をもった動物である (enosh hu shinuy vekamah tevaoth baal chayim)」というカルデア人の言葉に着目した¹⁵。つまり、ピコは人間が自由意志を発揮することで、ある意味では「なにものにもなれる」ことを示唆したのである¹⁶。この思想はフィチーノから受けついでものというよりも、ピコ特有のものである。ただ、人間の尊厳の内容について理解が違うとはいえず、フィチーノもピコもともに人間の尊厳を強調し、それが他の動物にはみられないと考えていた点は共通している。

⑥について。ピコは、人間が魂の善を重視して身体を軽視することで、この世ならぬ神界で「神々の客 (deorum conviva)」になることを望むようになる、と言っている¹⁷。それは、プラトンの『パイドロス』にある、翼をもってこの世を離れようとする欲求のあらわれだというのだ。ここから読み取れるのは、ピコもフィチーノとともに、身体を離れ、より高貴な存在へと魂ないし精神が向かうことを強く勧めているということである。

⑦について。ピコは熾天使、智天使、座天使といった、人間よりも上位にある存在に積極的に言及し、これらの存在をみとめている¹⁸。フィチーノにとっても、ピコにとっても、彼らは人間と神の中間に位置づけられる。そしてピコは、天使が人間にとって貴い導き手であることを認める一方で、悪魔の墮落（墮天）についても語っている¹⁹。

2. ピコは「いにしえの神学者たち」をどう論じたか

次に観点を变えて、フィチーノが紹介した7人の「いにしえの神学者たち」に対して、ピコがどのように言及し評価しているかを整理する。

まず、ゾロアスターについて。ピコによると、ゾロアスターは、自分自身を知るものは、自分自身においてすべてのものを知ると考えていた²⁰。ここでは魂が内省を通じて、感覚的な対象をみて得られるものよりも重要な真理を獲得することを念頭においているのだろう。またゾロアスターによると、魂は翼をもっていて、翼が落ちれば身体の中に沈潜し、翼が再び生えれば高みへと昇る²¹。このことは、人間の魂が神を知り神を目指して向上する可能性と、そうした望ましい方向からそれて墮落する可能性をともに表現している。ゾロアスターは、「目から汚れを洗い落とす」ことをすすめていたというが²²、これも人間の魂が重要な真理を認識する可能性をもっている一方、そのために真理を認識し神へ向かおうとすることを阻害する物事を遠ざけることも必要だということの意味していると考えられる。さらにピコは、プラトン主義者たちは常にこの上ない尊敬をもってゾロアスターに言及していた、ともいう²³。

ピコはフィチーノ同様『カルデア神託』をゾロアスターの思想を反映したものとみていたが、『900の提題』にはこの神託由来の命題もある。

- 1 分離された存在の主要な順序は、エジプト人が考えたような第一のものではない。むしろその上に根源的な、統一的で至高の順序がある。
- 2 運命は第一の種子的な力能の必然性ではなく、知性を分有した、魂をもった理性の習性である。優れたものにとっては変わらないものであり、劣ったものにとっては避けがたいものである。
- 3 可視的な諸事物の実体的質は、エジプト人たちが信じたように特定の分離した力から結果するものではない。むしろ、光の源泉の第一の容器から魂の輝きによって結果するのである。

4 部分的な魂は、エジプト人が言うように直接的に知性の輝きに照らされるわけではない。むしろ、悪霊の魂の総体を媒介として知性の輝きに照らされる。

5 可知的な順序は、エジプトのアモシスが言うように知性的な順序のうちにあるのではない。むしろ、すべての知性的な階層の上に、第一の一性の深淵のうちにある、非分有的な仕方で隠された第一の闇の暗がりの下にある。

6 月の上にあるものはすべて、純粋な光であり、諸々の自然世界の实体である。²⁴

ピコは神託のうちに、人間は運命に対して受動的な存在ではないという、彼自身がぜひとも強調したい思想を読み取っている。また、月下の感覚される様々な質がある領域と、その上の領域をわけるといった、アリストテレスに見られる考えをも読み込んでいる。

さらに『900の提題』には、ゾロアスターの言葉や彼について注釈しているカルデア人たちの言葉についてのピコ自身の見解をまとめた諸命題がある。

1 カルデアの解釈者たちがタルタルロスから第一の火にいたるはしごについてのゾロアスターの最初の言葉に関して言っていることは、宇宙における、等級づけられていない物質からすべての級をこえて広がる級にあるものにいたる諸々の本性の系列を表している。

2 同じ個所で、私は神秘的な諸々の力ということで解釈者たちが意味していたのは自然的魔術に他ならないと言った。

3 解釈者たちが、二種類の空気、水、土についてのゾロアスターの二つ目の言葉に関して言っていることは、単純に純・不純に分けることが出来るすべての元素は理性的・非理性的な住人をもつということの意味している。純粋なものは理性的な住人のみをもつのである。

4 同じ個所で、土の根ということで理解できるのは植物的生命のみである。それは、魂の植物への移転をも想定したエンペドクレスの言葉にも合う。

5 カルデアのホセアの解説に従うと、「ははっ、この大地は息子たちに向かって絶え間なく泣いているぞ」というゾロアスターの言葉からわれわれは原罪についての明示的な真理を与えられる。

6 11番目の箴言に関して、バックカスとシレノスという二種類の闇についてカルデアの解釈者たちが言っていることは、カバラ学者たちが二種類のワインについて言っていることを通じて完全に理解される。

7 解釈者たちが14番目の箴言について言っていることは、カバラ学者たちが口づけの死について言っていることによって完全に理解される。

8 17番目の箴言において、マギが、リネン、布、皮の三つの衣ということで理解していたのは、天上的、精神的、地上的という魂の三つのすみかに他ならない。

9 アダムが彼自身につくった皮のチュニック、そしてユダヤ神殿にある皮につい

ての先の命題から、なにがしかが理解される。

10 犬ということで、ゾロアスターは単に魂の非理性的な部分および対応する諸事物を理解している。ここからわかるのは、すべての解説の言葉をきちんと考慮する者は、ゾロアスター自身のように謎めいた仕方で語るということである。

11 「[この箇所文言欠如] リクトルが通るときに外出するな」というゾロアスターの言葉は、『出エジプト記』において、エジプトの初子を打ちながら天使たちが通っているときにイスラエル人たちが家をはなれることを禁じられていたことを通じて完全に理解される。

12 セイレーンということでゾロアスターが理解していたのは魂の理性的部分に他ならない。

13 少年ということで解釈者たちが理解していたのは知性に他ならない。

14 「三日にわたって犠牲を捧げよ、それ以上はしないように」というゾロアスターの言葉は、至高のメルカバの算術を通じて三日を数えることで、私に明瞭となる。この言葉において、キリストの降臨は明示的に予言されている。

15 ゾロアスターにおける雌山羊について理解すべきことは、『バイール』の本を読む人は雌山羊と霊の羊との親近性の何たるかを理解するということである²⁵

まずピコは、ゾロアスターによれば宇宙の諸事物はさまざまな階級に分類され、いわば完全性の上下関係によって階層づけられているとしている。また、神の子たるキリストの存在だけでなく、キリストの降臨までも読みこんでいる。さらに、人間の原罪までも示されており、人間が尊厳をもつだけではなく墮落傾向をももっていることが示唆されている。

ヘルメスについて。ピコは、ヘルメスが人間を「大いなる驚嘆」だとしていることについて、同意している²⁶。また『900の提題』にはヘルメスについての節もある。

1 命あるところにはどこでも、魂がある。魂があるところにはどこでも、精神がある。

2 すべての動かされるものは物的である。すべての動かすものは非物的である。

3 魂は身体のうちにある。精神は魂のうちにある。言葉は精神のうちにある。そして神はそれらの父である。

4 神はすべてを包み込み、そしてすべてとともにある。精神は魂を包み込み。魂はエーテルを包み込み。エーテルは物質を包み込んでいる。

5 世界のどんなものも、生命を欠いてはいない。

6 宇宙のどんなものも、死にさらされたり滅んだりすることはできない。

系：いたるところに生命があり、摂理があり、不死性がある。

7 6つの方法で神は人間に未来を知らせる。つまり、夢、前兆、鳥、内臓、霊、

巫女によって。

8 真なるものは、広まっておらず、定まっておらず、色がついておらず、形作られておらず、認められていない。それは裸であり、透明であり、それ自体で把握される、変化させることができない、完全に非物体的な善である。

9 誰のうちにも、10の仇なす者がいる。つまり、無知、悲しみ、不整合、情欲、不正義、貪欲、妬み、欺き、怒り、悪意、である。

10 ヘルメスによるところの、先の命題に述べた10の仇なす者について。深遠な観想者は、カバラにおける悪しき10の順序とその長官たちとがぴったり対応するとわかるだろう。これについては秘密であるから、私はカバラの命題では触れなかった。²⁷

ピコはヘルメスに強い反唯物論をみており、これを好意的に捉えていると思われる。自然を、魂をもたないものの集合体とみなすことの誤りを強調したがつているようである。また唯一の神がもつ父性に触れられているとともに、魂、精神、言葉の三者が並べられ、三位一体の暗示もある。そして人間の魂のみならず、他のものにも不死性が帰されている。加えてピコは、無知を遠ざけて神に向かうことが、人間にとって望ましい生き方だというヘルメスの思想に同意しているようである²⁸。さらに、後に述べるようにピコがカバラを高く評価し、ヘルメスの思想とも通じると考えていることも読み取れる。

オルペウスについて。ピコはオルペウスの詩をも解釈してみたが、それはもっぱら寓話で教説の奥義を示しており明晰な命題をそこから引き出すには手間がかかる、と述べている²⁹。そして『900の提題』には、オルペウス讃歌に含まれている魔術思想に関するピコ自身の見解をまとめた諸命題がある。

1 われわれによってはじめてオルペウス讃歌からひきだされた秘密の魔術を公に説明することは許されていないので、箴言の節によってそれを示すため、以下の諸命題でなされているように、観想的な人々の精神を刺激するのが有用であろう。

2 もし適切な音楽、魂の志向、そして賢人たちに知られている他の諸状況が揃っているならば、自然的魔術においてオルペウス讃歌ほど効果的なものはない。

3 オルペウスが歌った神々の名前は、そこから善ではなく悪がやってくる欺くような悪霊の名前ではなく、むしろ自然的な諸々の力、そして神的な諸々の力の名前である。それは人がもし神々の名前の使い方を知っているならば最大限の効用がもたらされるように、真の神によってこの世界に広められた。

4 驚くことにダビデの讃歌がカバラの作品となっているが、オルペウスの讃歌も真実の、許可された、自然的魔術の作品となっている。

5 オルペウスの讃歌の数は、それによって三位の神が世界を創造した、ピュタゴラス的な四数の方法によってかぞえられた数と同じである。

6 各々の自然的あるいは神的力にとって、特性のアナロジーも、名前も、讃歌も、作品も、比が維持されているなら同じである。そしてこれを説明しようとする者はみな、対応関係をみてとるだろう。

7 可感的な諸々の特性を完全に秘密のアナロジーの方法を通じて知性化する仕方を知らない者はみな、オルペウスの讃歌から妥当なものを全く理解しない。

8 ウェヌスの一性から恩寵の三性への分割、運命の一性からつつましさの三性への分割、サトゥルヌスの一性からイオブ、ネプトゥルヌス、プルートーの三性への分割を深遠に知的に理解する者はだれも、オルペウス神学において適切に進む仕方をみてとるだろう。

9 オルペウスにおける守護者たちとディオニシオスにおける諸々の力能は同じである。

10 先の命題に取り組む者は誰でも、イサクの畏怖に帰されている諸々のものにしたがったカバラにも取り組むべきである。

11 ネレウスを惹きつけることがない者はだれでも、パラエモンとレウコテアに近づいても無駄であろう。ネレウスを惹きつけていても、第一の魂の三性に取り組んでいない者も同様である。

12 八つの海上の讃歌を通じて、物体的自然の特性がわれわれに示される。

13 オルペウスとサマエルにおけるティホンは同じである。

14 先の命題に取り込むときに知的に取り組むなら、白昼に北極星があるこぐま座とともにあることになるだろう。しかしもし彼がまったく世俗的な仕方でいくなら、彼は自分自身の判断で行かなければならないだろう。

15 オルペウスにおける夜とカバラにおけるエンソーフは同じである。

16 先の命題から、プロクロスが説明するより正しく説明されうことは、その神学者の言葉が意味していることは、世界の創造の夜を問い訊ねつつ世界の製作者を表現していることである。

17 上で言われたことから、なぜ『饗宴』でポロスがディオティマによって助言者の息子と名づけられ、そして聖書でイエスが大きいなる助言者の御使いと名づけられたのかがわかる。

18 水の魂は、下位の諸事物を生成するように、それ自身に存する上位の諸事物を観想する。それはオルペウスによって、海、ネプトゥルヌス、大洋の三つの讃歌においてうたわれているとおりである。

19 ウェスタを惹きつけない者はみな、自分の取り組みから何も得ることがないだろう。

20 父的な精神に、つまりプロトゴノス、パラス、サトゥルヌス、ウェヌス、レア、法、バックカスに帰されている七つの讃歌を通じて、知識があり深遠な観想者は世界の終わりについて何かを予言できるだろう。

- 21 先の讃歌に取り組んでも、カバラに取り組まなければ無駄である。その特性は、すべての形相的な、連続的・離散的量に従事するものである。
- 22 英雄たちを二つに、母国のものと外国のものにわけない者はすべて、しばしば誤りを犯す。
- 23 アポロンに近づく者はみな、三年ごとのバッカス祭をとりなすであろう。そしてそれを言い難い名前を通じて完成させるだろう。
- 24 まずバッカスのムーサとともに交わらないかぎりには、だれもどのバッカスによっても酔わされはしない。
- 25 第一の地上の形相に帰されている四つの讃歌を通じて、その形相化可能な本性がわれわれに示される。
- 26 魂に完全に回帰する者はみな、自分の形相と第一の形相を同一視するであろう。
- 27 先の命題に取り組む者はみな、第三のイオブに生きさせるものとしてではなく生きたものとして近づく。
- 28 パンを惹きつけない者はみな、自然とプロテウスに近づいても無駄である。
- 29 普遍的な魂化のあとに特定の魂化があるように、普遍的な摂理のあとに特殊的な摂理がある。
- 30 先の命題から、オウイディウスがなぜ『イービス』の呪いで、大地と水を支配する霊を呼んだあとに大地とネプトゥルヌスを呼んだのかがわかる。
- 31 魂の定義の解説におけるアリストテレスの言葉にきちんと留意する者はだれでも、なぜオルペウスが注意深さをパラスとウェヌスに帰しているかがわかるだろう。³⁰

ピコはオルペウスが複数の神々について語っているからといって、一神教と矛盾した教えを説いているわけではないと解釈している。ピコはあくまで一神教の枠内でオルペウス讃歌を解釈しようとしているのである。またピコは三位の神という言葉を使って創造主を表現している。これは三位が一体となってはじめて神による創造が可能であるという意味ではなく、神は父として世界を創造するが、子と聖霊という別の位格ももつ、という意味であろう。また魂についての考察があり、人間が内なるものへ目を向けることで、普遍的な真理に目覚めることができると示唆されている。

アグラオパモスについて。彼は、ピュタゴラスやピロラオスとともに、数に習熟し、哲学と数の考察を結びつけたとされる³¹。

ピュタゴラスについて。彼にも、『900の提題』でさまざまなテーゼが帰されている。

- 1 一、他性、そして何であるか (id quod) は、諸々の数の原因である。一は諸々の単位の原因であり、他性は諸々の生成的な数の原因であり、何であるかは諸々の実体的な数の原因である。

- 2 分有された諸々の数のうち、あるものは諸々の数の形象で、他のものは諸々の形象の統一である。
- 3 点の単位が、双数の他性におちこむところに、第一の三角形が存在する。
- 4 1、2、3、4、5、12の順序を知る者は皆、摂理の分配を確かに把握するであろう。
- 5 1、3、7によって、われわれはパラスのうちに、区別の統一、そして原因となる至福的な知性の力を知る。
- 6 算術的、幾何学的、調和的という三つの比は、テミスの三人の娘を示す。つまり、象徴として存在する審判、正義、平和である。
- 7 光線、反射、屈折の秘密によって、遠近法の学知のうちに、われわれは知性的、魂的、物体的という三つの本性について知らされる。
- 8 理性は情欲に対して、オクターブ、完全8度の比を保つ。
- 9 怒りやすさは、情欲に関して5度の比を保つ。
- 10 理性は怒りに対して完全4度の比を保つ。
- 11 感覚の判断は音楽に適用されるべきではない。知性の判断のみが適用されるべきである。
- 12 形相を数えるとき、われわれは40を超えるべきではない。
- 13 どの平方数も、魂を象徴する。
- 14 どの素数も、神を象徴する。³²

顕著なのは数に対する多岐にわたる洞察である。一は根源的であり、神に結び付けられる。また「三つの比」「三つの本性」を語る際には、それらと三位一体との関わりもピコは意識していたであろう。また数についての知識は、神の摂理を知る手立てでもあるとされる。さらに数は音楽とも関わる。ある音と別の音との関係は、数の比で表現され、音同士が織りなす調和が数学的考察の対象になりうると考えられている。

ピロラオスについて。ピコは、モーセやエジプト人たちともかかわる黄金の詩を、ピュタゴラスよりもさらに学識あるピロラオスが伝えた、という³³。ピコは、ギリシア人のうち最高の知性たちは、エジプト人たちを師と仰いだという。そうしたギリシア人たちとは、ピュタゴラス、プラトン、エンペドクレス、そしてデモクリトスである³⁴。

プラトンについて。ピコは『ソフィスト』を参照し、プラトンによれば一でないことと無であることは同じであり、非存在は一とは言えないことができないとし、一と存在が等価であることを認めたと解釈している³⁵。そして一も存在もともに、神に帰する性質だと考えるのである。またピコは、『パイドロス』で示されている、現世から逃れゆくことを勧める思想を評価する³⁶。人間の魂が神を目指して高みへと飛翔することをピコ自身が勧めていると言える。加えてピコは『アルキビアデス』には、自分自身を知ることですべてを知る、というゾロアスターに示唆された思想が記されている、という³⁷。魂が普遍的な

真理を知る能力を秘めているという有名なプラトンの思想が、ゾロアスターを引き継いだものだと解釈されているのである。さらにプラトンはピュタゴラスの伝統を継いで、数についての哲学的考察もしているという³⁸。

3. ピコがその他の人物たちをどう論じたか

さらに、フィチーノのいう「いにしへの神学者たち」とはまた別の人物で、ピコが重視した人々を紹介し、彼らがピコによってどのように捉えられていたかをみてみよう。

3.1 モーセ

ピコがキリスト教徒であったことからすれば驚くにはあたらないが、モーセの教えの哲学的意義をピコは強調する。例えば神が、精神をともなった星々、永遠の魂をともなった惑星たちを創造し、地上の動物たちを創造し、最後にこれらを含んだ宇宙の美を賛嘆すべき存在である人間を創造したことがモーセにより（そして『ティマイオス』により）証言されているとされる³⁹。またピコは、モーセがシナイ山において、律法だけでなく律法の解釈まで授かった（ただそれを直接人々には伝えなかった）が⁴⁰、その内容は他の高位の祭司たちに伝えられたという。

さらにピコの著作『ヘプタプルス』は、全体がモーセ書の解釈書であり、そのことをピコ自身が冒頭で明言している⁴¹。ここでピコは、モーセはエジプトの伝承を広く学び取った、という⁴²。ピュタゴラス、プラトンなどもエジプトから学んだのであり、ヌメニウスの言葉を借りれば、プラトンはアッティカのモーセなのである。そしてモーセは、知性的、天上的、元素的、人間的世界を区別し、宇宙論や自然哲学をも展開している⁴³。モーセによると、空虚、暗黒のうちに神は諸事物を生み出した⁴⁴。またモーセは「水」をすべての物質的形相の総称と解し、地上の諸事物が元素によっていかに形成されるかについても示唆している⁴⁵。さらにモーセはエジプト人とともに、天使が人間よりも優れた仕方であらざる真理を把握するとしている⁴⁶。

3.2 アリストテレス

ピコは、フィチーノよりももっと明確に、アリストテレスを高く評価する。ピコは『人間の尊厳について』で、アカデメイア派かペリパトス派かにこだわるのは狭い精神のすることだと述べてプラトンとアリストテレスの哲学が両立可能であることを示唆し⁴⁷、さらに「プラトンとアリストテレスの協和 (Platonis Aristotelisque concordia)」を宣言する⁴⁸。

『存在、そして一について』では、ピコは冒頭で、プラトンとアリストテレスの両方と調和する哲学をつくるというプロジェクトを掲げている⁴⁹。そして、プラトンもアリストテレスとともに、一と存在を等価で置き換え可能であると考えたと解釈する。ピコは、『形而上学』6巻では存在は実体か偶有性であるかだとされているが、神は実体の10のカ

テゴリーのどれにもあてはまらないし、ましては偶有性ではないことも認める⁵⁰。しかし、12巻では、神の統一性が示されているというのである。こうして神は存在であり、かつ一であるということになる。アリストテレスは結局、師プラトンとともに、真に普遍的な神学を提示していたと考えられている。

3.3 他の古代ギリシアの哲学者たち

古代ギリシアの哲学者たちでは、シンプリキオス、テミスティオス、アレクサンドロス、テオフラストス、アンモニオス、ポルピュリオス、イアンブリコス、プロティノス、プロクロス、ヘルメイアス、ダマシキオス、オリュンピオドロスが挙げられている⁵¹。彼らの哲学は「総じて実に輝かしく、そしてとりわけ純粹である (in universum quidem nitida, in primis et casta)」とされている⁵²。また、プラトン主義者たちには特に、神的なものが感じ取れるという。

3.4 スコラ哲学者たちとイスラム世界の哲学者たち

ピコはスコラ哲学者たちをイスラム世界の哲学者たちとともに列挙して高く評価する⁵³。『人間の尊厳について』でピコが挙げているのはヨハネス・ドゥンス・スコトゥス、トマス・アクイナス、アエギディウス、フランシスコ、アルベルトゥス・マグヌス、ガンのヘンリクス、アヴェンパーケ、アルファラビウス、アヴィケンナである⁵⁴。トマスはとくに、ディオニシオスとともに、「われわれの神学の栄光」とまでされている⁵⁵。また、ドゥンス・スコトゥスとトマス、アヴィケンナとアヴェロエスの哲学は対立すると考えられることがあるが、ピコは彼らの哲学も協和させることが可能だという⁵⁶。

3.5 カバラ

ピコがユダヤ教の神秘主義的哲学であるカバラに傾倒していたことは、多くの研究者が指摘している。ピコはフラウィウス・ミトリダテスという学者からカバラを学び、カバラの著作をラテン語に訳してもらったという⁵⁷。ピコは『ヘプタプルス』でも、カバラの著作を残した人物たちに触れている。ピコはまず、アンブロシウス、アウグスティヌスといった初期キリスト教教父はモーセ書について優れた解釈を残したが、詳論することを避ける旨を述べている⁵⁸。それは彼らが重要でない、偉大でないという理由ではなく、彼らの解釈が深いもので優れているために軽く論じて済ませることができないし、本格的に多くの紙面を割かなければならなくなれば書全体の構成がくずれてしまうからである。同じ理由で、ピコは次のようにカバラ学者たちを列挙した上で、彼らについて詳論はできないという。

われわれはここで、イオネテスあるいはアンケオロスあるいは古代のシメオンがカルデアの言葉で遺したということには、あるいは初期のヘブライ人たち、エレアザル、

アバ、ヨハネ、ネオニウス、イサク、ヨセフには、あるいはより最近のゲルソニウス、サディアス、アブラム、両モーセ、ザロモン、マナヘンには触れないでおこう。⁵⁹

文脈を考慮すれば、ピコが少なくとも初期キリスト教教父と同様に、カバラの著者たちがモーセ書の深い内容をもつ解釈を残していると理解していることがわかる。ブライアン・コペンハーヴァーによればピコは、カバラはモーセに由来するものであるがゆえに、古代ギリシアの哲学よりも聖なるものであると考えたのであった⁶⁰。

4. 総括

ピコがいにしへの神学をどう受け継いだか、という問いに対しては、複数の観点から答えることができる。

一つ目の観点は、フィチーノが考えたところのいにしへの神学に属するテーゼを、ピコ自身がいくつ継承したかを吟味するものである。冒頭にあげた①から⑦は、④だけは明示的とは言えないが他はピコは継承しているといえる。

二つ目の観点は、フィチーノが評価したところのいにしへの神学者を、フィチーノと同様に普遍的な神学の保持者とみなしたかどうか、を問題とする。本研究ノートで検討した限りでは、ピコによる彼らの扱いはフィチーノによるものとかかなり類似している。アグラオパモス、ピロラオスについて扱いが小さいものの、他の人物たちにはおおむね共通した神観、魂論を見出しているのである。ただピコはいにしへの神学者たちを特権的な存在としたわけではなく、他の多くの人物たちを、同様の普遍的な真理を認識したものと認めている。この点で、ピコはフィチーノと大きく異なる⁶¹。例えばアリストテレスとスコラ哲学者たちについて言えば、フィチーノは表現が拙いこともありいにしへの神学者たちに列することを避けたようであるが、ピコはあえて彼らを普遍的な神学を伝えた人物たちに含めるのである⁶²。

三つ目の観点は、フィチーノがいにしへの神学を受け継いで提示した理論体系と、ピコ自身の理論体系の異同である。しばしば指摘されているように、ピコは一と存在が等価であるとし、アリストテレスのみならずプラトンもまたこの点を受け入れている、と解釈した。これはフィチーノにとっては受け入れられない解釈である。さらに、ピコはよく知られているように、人間の自由をフィチーノ以上に強調した。人間は自由意志を使って選択することで、悪をなし、破壊的な存在になることもありうる。それも含め、人間は多様な可能性をはらんだ存在であり、人間の尊厳はそこにこそある、ということである。この思想は、近代の人間観の先駆ともされシェリングを先取りしているところもあり、ピコが思想史上高く評価されるゆえんでもあるが、フィチーノにはないものである。後に「いにしへの神学」「永遠の哲学」に関心をもつ哲学者たち、ステウコ、ド・モルネー、ライプニッツなどもピコほどは大胆ではなかったと言えるかもしれない。

略号：

C = Giovanni Pico della Mirandola, *Conclusiones*, Cited by the page number of *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses (1486)*, translated by S.A. Farmer, 1998, Tempe: Arizona State University Press.

EU = Giovanni Pico della Mirandola, *De ente et uno*, Cited by chapter.

H = Giovanni Pico della Mirandola, *Heptaplus*, Cited by book and chapter.

HD = Giovanni Pico della Mirandola, *Oratio de hominis dignitate*, Cited by the page number of *Über die Würde des Menschen*, translated by N. Baumgarten, 1990, Hamburg: Meiner.

O = Marcilio Ficino, *Opera Omnia*. Cited by volume and page.

TP = Marcilio Ficino, *Theologia platonica*, Cited by book, chapter and section.

文献

Blum, P.R. (2007) "Pico, Theology, and the Church." In *M.V. Dougherty ed. Pico della Mirandola: New Essays*. New York: Cambridge University Press, pp. 37-60.

Celenza, C. S. (1999) "Pythagoras in the Renaissance: The Case of Marsilio Ficino," *Renaissance Quarterly*

Copenhaver, B. P. (2016) "Giovanni Pico della Mirandola," *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.

Copenhaver, B. P. and C.B. Schmitt (1992) *Renaissance Philosophy*. New York, NY: Oxford University Press.

ドレスデン、ゼム (1983) 『ルネサンス精神史』東京：平凡社（高田勇訳）

枝村 祥平 (2019) 「フィチーノといにしへの神学者たち」『金沢星稜大学人文学研究』4 (2) : 9-21

Field, A.M. (1988) *The Origin of the Platonic Academy of Florence*. Princeton: Princeton University Press.

速水 敬二 (1967) 『ルネッサンス期の哲学』筑摩叢書

Kristeller, P. O. (1961) *Renaissance Thought: The Classic, Scholastic and Humanist Strains*. New York: Harper.

— (1964) *Eight Philosophers of the Italian Renaissance*. Stanford: Stanford University Press.

Poppi, A. (1988) "Fate, fortune, providence and human freedom." In C.B. Schmitt and Q. Skinner eds. *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, New York: Cambridge University Press, pp. 641-667.

佐藤 三夫 (1981) 『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』東京：有信堂

Schmitt, C. B. (1966) "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz," *Journal of the History of Ideas*, 27 (4) : 505-532.

(注)

1 TP.12.1.14, O.2.1826

2 枝村, 2019, pp. 16-17参照。

- 3 A.M. フィールドは、ピコがフィチーノから影響を受けたのは事実であるが、フィチーノが主催したアカデミーの一員ではなかったとしている。Field, 1988, p. 199参照。P.O. クリステラーも、「フィレンツェアカデミー」にはピコの説を知らなかった者も少なからずいるとし、ピコを傑出した人物として認めながらも、アカデミーの旗手とみなすことが誤解につながる可能性を指摘している。Kristeller, 1964, pp. 54-55参照。
- 4 “Propterea non contentus ego, praeter communes doctrinas multa de Murcurii Trismegisti prisca theologia, multa de Chaldæorum, de Pithagoræ disciplinis, multa de sectoribus Hebraeorum addidisse mysteriis, plurima quoque per nos inventa et meditate, de naturalibus et divinis rebus disputanda proposuimus.” (HD.46-48) 大出・阿部・伊藤訳を参考にした。
- 5 “Est autem, et praeter illam, alia, quam nos attulimus, nova per numerous philosophandi institutio antique, illa quitem et a Priscis Theologis, a Pythagora praesertim, ab Aglaophamo, a Philolao, a Platone prioribusque Platonicis observata, sed quae hac tempestate, ut praeclara alia, posteriorum incuria sic exolevit, ut vix vestigia ipsius ulla reperiantur.” (HD.50) 大出・阿部・伊藤訳を参考にした。
- 6 EU.4
- 7 EU.5
- 8 HD.4
- 9 HD.62
- 10 HD.4
- 11 H.7.4
- 12 HD.12 『ヨブ記』 38 : 7参照
- 13 HD.24 Poppi, 1988, p. 652参照。
- 14 HD.2
- 15 HD.10
- 16 速水敬二は、ピコの自由意志論を従来の占星術思想と対比する。ピコによれば個人の運命は彼あるいは彼女が生まれついた星によるのでは決してなく、自らが選び取ったものだ、というのである。速水, 1967, 66-68頁参照。
- 17 HD.24 ゼム・ドレスデンは、ピコが自由意志を信じているからこそ、自由に善へと向かい、本来の目的である「天上のもの」の追求を尊いと考える、と解釈している。ドレスデン, 1983, 22-23頁参照。
- 18 HD.10-11
- 19 HD.62
- 20 HD.26
- 21 HD.28
- 22 HD.30
- 23 HD.64
- 24 “1. Ordo separatorum principalis non est primus, ut putant aegyptii, sed super eum est ordo fontalis, unialiter superexaltatus.
2. Fatum non est necessitas primae potentiae seminalis, sed est intellectualiter participata habitudo animalium rationum, indeclinans a superioribus, inevitabilis ab inferioribus.
3. Substantiales rerum visibilium qualitates non a virtute separata particulari, ut credunt aegyptii; sed a primo receptaculo fontis luminum per animalem splendorem dependenter

resultant.

4. Animae partiales non immediate ut dicunt aegyptii, sed mediantibus totalibus animis demoniacis, ab intellectu splendor illuminantur.
 5. Coordinatio intelligibilis non est in intellectuali coordinatione ut dixit Amosis aegyptius: Sed est super omnem intellectualem hierarchiam in abyso primae unitatis et sub caligine primarum tenebrarum inparticipaliter abscondita.
 6. Quicquid est a luna supra, purum est lumen, et illud est substantia orbium mundanorum.” (C.338)
- 25 “1. Quod dicunt interpretes chaldei super primum dictum Zoroastris, de scala a Tartaro ad primum ignem, nihil aliud significat quam seriem naturarum universi a non gradu materiae ad eum qui est super omnem gradum graduate protensum.
2. Ibidem dico interpretes nihil aliud per virtutes mysterales intelligere quam naturalem magiam.
 3. Quod dicunt interpretes super dictum secundum Zoroastris de duplici aere, aqua, et terra, nihil aliud sibi vult nisi quodlibet elementum quod potest dividi per purum et impurum habere habitatores rationales et irracionales; quod vero purum est tantum; rationales tantum.
 4. Ibidem per radices terrae nihil aliud intelligere possunt quam vitam vegetalem: convenienter ad dicta Empedoclis, qui ponit transanimationem etiam in plantas.
 5. Ex dicto illo Zoroastris: Ha ha, hos terra deflet usque ad filios, sequendo expositionem Oziae chaldei; expressam habemus veritatem de peccato originali.
 6. Dicta interpretum Chaldeorum super .xi. Amphorismo, de duplici ebriatione, Bacchi et Sileni, perfecte intelliguntur per dicta cabalistarum de duplici vino.
 7. Quae dicunt interpretes super .xiii. amphorismo perfecte intelliguntur per ea quae dicunt cabaliste de morte osculi.
 8. Magi in .xvii. amphorismo nihil aliud intelligunt per triplex indumentum ex lino, panno, et pellibus, quam triplex animae habitaculum, caeleste, spiritale, et terrenum.
 9. Poteris ex praecedenti conclusione aliquid intelligere de pelliceis tunicis quas sibi fecit Adam, et de pellibus quae erant in Tabernaculo.
 10. Per canem nihil aliud intelligit Zoroaster quam partem inrationalem animae et proportionalia, quod ita esse videbit qui diligenter dicta omnia expositorum consideraverit, qui et ipsi sicut et Zoroaster enigmatische loquuntur.
 11. Dictum illud Zoroastris, ne exeas cum transit Lictor [...] perfecte intelligitur per illud Exodi, quando sunt prohibiti Israhelite exire domos suas in transitu angeli interficientis primogenita aegyptiorum.
 12. Per Syrenam apud Zoroastrem nihil aliud intelligas quam partem animae rationalem.
 13. Per puerum apud interpretes nihil aliud intellige quam intellectum.
 14. Per dictum illud Zoroastris, adhuc tres dies sacrificabitis et non ultra: apparuit mihi per arithmetica superioris merchiave illos computandi dies, esse in eo dicto expresse praedictum adventum Christi.
 15. Quid sit intelligendum per capras apud Zoroastrem intelliget qui legerit in libro Bair quae sit affinitas capris et quae agnis cum spiritibus.” (C.486-492)

26 HD.2

- 27 “1. Ubicunque vita, ibi anima; ubicunque anima, ibi mens.
2. Omne motum corporeum, omne movens incorporeum.
3. Anima in corpora, mens in anima, in mente verbum, tum horum pater deus.
4. Deus circa omnia atque per omnia: mens circa animam: anima circa aerem: aer circa materiam.
5. Nihil est in mundo expers vitae.
6. Nihil est in universo passibile mortis vel corruptionis.
Correlarium: Ubique vita: ubique providentia: ubique immortalitas.
7. Sex viis futura homini deus denuntiat: per Somnia: Portenta, Aves, Intestina, Spiritum, et Sybillam.
8. Verum est quod non perturbatum, non determinatum, non coloratum, non figuratum, non concussum, nudum, perspicuum, a seipso comprehensibile, intransmutabile bonum, ac penitus incorporeum.
9. Decem intra unumquemque sunt ultores: ignorantia, tristitia, inconstantia, cupiditas, iniustitia, luxuries, invidia, fraus, ira, malitia.
10. Decem ultores de quibus dixit secundum Mercurium praecedens conclusion, videbit profundus contemplator correspondere male coordinationi denariae in cabala et praefectis illius, de quibus ego in cabalisticis conclusionibus nihil posui, quia est secretum.” (C.340-342)
- 28 C.S. セレンザは、ピコがヘルメスを踏まえて、人間が自らの本性を神的なものへすら変えることができる可能性に触れているという。Celenza, 1999, p. 685参照。
- 29 HD.64
- 30 “1. Sicut secretam magiam a nobis primum ex Orphei hymnis elicitam fas non est in publicum explicare, ita nutu quodam, ut in infrascriptis fiet conclusionibus, eam per Amphorismorum capita demonstrasse, utile erit ad excitandas contemplativorum mentes.
2. Nihil efficacius hymnis Orphei in naturali magia, si debita musica, animi intentio, et caeterae circumstantiae quas norunt sapientes, fuerint adhibitae.
3. Nomina deorum quos Orpheus canit non decipientium demonum, a quibus malum et non bonum provenit. Sed naturalium virtutum divinarumque sunt nomina, a vero deo in utilitatem maxime hominis, si eis uti sciverit mundo distributarum.
4. Sicut hymni David operi Cabalae mirabiliter deserviunt, ita hymni Orphei operi verae, licitae, et naturalis magiae.
5. Tantus est numerus hymnorum Orphei, quantus est numerus cum quo deus triplex creavit saeculum, sub quaternarii pythagorici forma numeratus.
6. Quarumcunque virtutum naturalium vel divinarum eadem est proprietatis analogia, idem etiam nomen, idem hymnus, idem opus, servata proportione. Et qui tentaverit exponere videbit correspondentiam.
7. Qui nescierit perfecte sensibiles proprietates per viam secretae analogiae intellectualizare, nihil ex hymnis Orphei sanum intelliget.
8. Qui profunde et intellectualiter divisionem unitatis venereae in trinitatem gratiarum, et unitatis fatalis in trinitatem parcarum, et unitatis Saturniae in trinitatem Iovis, Neptunni, et Plutonis, intellexerit, videbit modum debite procedendi in orphica theologia.
9. Idem sunt curetes apud Orpheum, et potestates apud Dionysium.

10. Qui praecedentis conclusionis opus attentaverit, adhibeat opus cabalae secundum appropriata timori Isaac.
 11. Frustra Palemonem et Leucotheam adibit, qui Nereumnon attraxerit, nec Nereum attrahet qui circa primariam animalem trinitatem operatus non fuerit.
 12. Per octonarium numerum hymnorum maritimorum, corporalis naturae nobis proprietas designatur.
 13. Idem est Typhon apud Orpheum, et Zamael in Cabala.
 14. Siquis in opere precedentis conclusionis intellectualiter operabitur, per meridiem ligabit septentrionem; si vero mundialiter per totum operabitur: iudicium sibi operabitur.
 15. Idem est nox apud Orpheum et ensoph in Cabala.
 16. Ex praecedenti conclusione potest quis rectius exponere quam exponat Proclus quid sibi velit illud dictum theologi inducentis opificem mundi noctem consulentem de opificio mundano.
 17. Ex eisdem dictis possunt intelligi cur in Symposio a Diotima Porus consilii filius, et Iesus in sacris litteris angelus magni consilii nominetur.
 18. Anima aquea, ut inferiora generat, superiora contemplatur in seipsa se sistit, triplici hymno maris, Neptunni, et oceani ab Orpheo decantatur.
 19. Nihil habebit firmum in opere qui vestam non attraxerit.
 20. Per septennarium hymnorum paternae menti attributorum, Prothogni, Palladis, Saturni, Veneris, Rheae, Legis, Bacchi, potest intelligens et profundus contemplator de saeculi consumatione aliquid coniectare.
 21. Opus praecedentium hymnorum nullum est sine opere Cabale, cuius est proprium praticare omnem quantitatem formalem continuam et discretam.
 22. Qui heroas in duplices non diviserit, nativos et adventitious, saepe errabit.
 23. Qui Apollinem adibit, mediabit opus per Bacchum triethericum, et consumabit per nomen ineffabile.
 24. Non inebriabitur per aliquem Bacchum, qui suae musae prius copulatus non fuerit.
 25. Per quaternarium hymnorum primae formae mundanae attributorum sui formabilis natura nobis designatur.
 26. Qui perfecte in animam redierit, primae formae suam formam aequaverit.
 27. Qui praecedentis conclusionis opus tentaverit, Iovem adibit tertium ut viventem, non ut vivificantem.
 28. Frustra adit naturam et protheum, qui pana non attraxerit.
 29. Sicut post universalem animationem est particularis animatio, ita post universalem providentiam est particularis providentia.
 30. Ex praecedenti conclusione sciri potest cur Ovidius in execratione in Ibin, postquam invocavit numen quod terram regit et aquam, terram invocat et Neptunnum.
 31. Qui annotaverit diligenter dicta ab Aristotele in expositione definitionis de anima, videbit cur Orpheus Palladi et Veneri vigilantiam attribuerit.” (C.504-514)
- 31 HD.50
- 32 “1. Unum, alteritas, et id quod est sunt causa numerorum: Unum unitorum, alteritas generativorum, id quod est substantialium.
2. In participatis numeris alie sunt species numerorum, alie specierum uniones.

3. Ubi unitas punctalis cadit in alteritatem binarii, ibi est primo triangulus.
4. Qui .i.ii.iii.iiii.v.xii. ordinem cognoverit, providentiae distributionem exacte tenebit.
5. Per Unum, Tria, et Septem, scimus in Pallade unificativum discretionis, causativam et beatificativam intellectus potestatem.
6. Triplex proportio Arithmetica, Geometrica, et Harmonica, tres nobis Themidos filias indicat: Iudicii, Iusticiae, Pacisque existentes symbola.
7. Per secretum radii recti, reflexi, et refracti in scientia perspective, triplicis naturae admonemur intellectualis, animalis, et corporalis.
8. Ratio ad concupiscentiam habet proportionem diapason.
9. Irascibilis ad concupiscentiam habet proportionem a diapente.
10. Ratio ad iram habet proportionem diatessaron.
11. Iudicium sensus in musica non est adhibendum, sed solius intellectus.
12. In formis numerandis non debemus excedere quadragenarium.
13. Quilibet numerus planus aequilaterus animam symbolizat.
14. Quilibet numerus linearis symbolizat deos." (C.334-336)

33 H.Prohemium

34 H.Prohemium

35 EU.2

36 HD.24

37 HD.26

38 HD.50

39 HD.4

40 HD.56-58

41 H.Prohemium

42 H.Prohemium

43 H.5.Prohemium

44 H.7.1

45 H.1.3

46 H.3.2

47 HD.42

48 HD.48

49 EU.Prohemium

50 EU.4

51 HD.44

52 HD.44

53 クリステラーは、中世のアリストテレス主義者たちを人文主義の視点から批判するエルモラオ・バルバロに対して、ピコが彼らを擁護していることを指摘している。Kristeller, 1961, p. 44 参照。

54 HD.42-44

55 H.2.Prohemium

56 HD.42-44

57 Blum, 2007, p. 50参照。

58 H.Prohemium

59 “De his item quae vel Ionehtes vel Anhelos vel Simeon antiquus Caldaice tradiderunt vel ex Hebreis aut veteres Eleazarus Aba, Iohannes, Neonias, Issac, Ioseph: aut Iuniores Gersonides Sadias Abraa uterque Moses Salamon & Manaem coscripserunt nulla nos in praesentia mentione habebimus.” (H.Prohemium)

60 Copenhaver, 2016参照。

61 Schmitt, 1966, p. 512参照。

62 コペンハーヴェーとC.B. シュミットは、ピコがレトリックを皮相で欺くようなものに過ぎないとみなしているとする。Copenhaver and Schmitt, 1992, p. 170参照。佐藤三夫も、ピコが雄弁は哲学者にふさわしくなく、「知恵は外的な飾りを必要としない」と述べていることに触れている。佐藤, 1981, p. 251参照。